

報 恩 抄 送 文

建治二年七月二六日 五五歳

御状給はり候ひ畢おわんぬ。親疎しんそと無く法門と申すは心に入れぬ人にはいはぬ事にて候ぞ、御心得候へ。御本尊まい図して進らせ候。此の法華經は仏の在世よりも仏の滅後、正法よりも像法、像法よりも末法の初めには次第おんてきに怨敵強くなるべき由をだにも御心得へあるならば、日本国に是より外に法華經の行者なし。これを皆人存じ候ひぬべし。

道善御房の御死去の由、去ぬる月粗承ほぼり候。自身早々と参上し、此の御房をもやがてつかはすべきにて候ひしが、自身は内心は存ぜずといへども人目には遁世とんせいのやうに見えて候へば、なにとなく此の山を出でず候。此の御房は、又内々人の申し候ひしは、宗論やあらんずらんと申せしゆへに、十方ぶんにわかつて經論等を尋ねしゆへに、国々の寺々へ人をあまたつかはして候に、此の御房は駿河駿河の国へつかはして当時こそ来たりて候へ。又此の文は随分大事の大事どもをかきて候ぞ、詮聞なからん人々にきかせなばあしかりぬべく候。又設たとひさなくとも、あまたになり候はゞほか外さまにもきこえ候ひなば、御ため又このため安穩ならず候はんか。御まへと義城房と二人、此の御房をよみてとして、嵩かさがもりの頂にて二・三遍、又故道善御房の御こはかにて一遍よませさせ給ひては、此の御房にあづけさせ給ひてつねに御聴聞候へ。たびたびになり候ならば、心付づかせ給ふ事候なむ。恐々謹言。

七月二十六日

日 蓮 花 押

清 澄 御 房